様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：３３９１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ１１１０１

研究課題名（和文）わかりやすいギャンブル（パチンコ含）アディクションに関するワークブックの開発

研究課題名（英文）Development of an easy-to-understand workbook on gambling (including pachinko) addiction

研究代表者
水谷　聖子（Mizutani, Seiko）

日本福祉大学・看護学部・教授

研究者番号：８０２５９３６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：わかりやすいワークブックの開発を行った。「わかりやすさ」「生きづらさ」「ヘルスリテラシー」を踏まえ、①ニコチン、②アルコール、③ギャンブル（パチンコ含む）、④スマホ・ネットのアディクションの基礎知識はそれぞれで作成した。共有部分は、認知行動療法をベースに可視化し理解できる内容とし「生きづらさ」にフォーカスした。自身が陥っている状況を客観視できるようにチェック表を導入した。５回まで継続して繰り返し記録ができ変化にも着目できるようにした。引き続き継続し、2025年度内に活用できる環境を整える。
実践報告、専門家を対象としたワークショップの開催、市民向けにアディクションに関する啓発活動を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
生まれながらにしてアディクションの人はいない、成育歴、生活環境、家族関係、友人関係、職場の人間関係や職場環境などにより、アディクション、クロス・アディクションに陥っていくことが多い。特に、生活困窮者やホームレス経験者で知的障害、発達障害などがあるある。
わかりやすいハンドブックは、アディクションであるが故に日常生活の中で克服する難しさがあることの理解、支援者とワークブックに取り組みながら手立てを考えるツールとして有効であると考える。

研究成果の概要（英文）：An easy-to-understand workbook was developed. Based on easy-to-understand,” “difficulty in living,” and “health literacy,” basic knowledge on (1) nicotine, (2) alcohol, (3) gambling (including pachinko), and (4) smartphone/internet addiction was created for each. The shared part focused on “difficulty in living” with contents that can be visualized and understood based on cognitive-behavioral therapy. A checklist was introduced to enable participants to objectively view their own situations, and to enable them to record up to five times continuously and repeatedly, and to focus on changes in the situation. We will continue this project and prepare an environment where the system can be utilized by the end of FY2025.
Reporting of practices, workshops for professionals, and educational activities on addiction for the public were held.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：アディクション　生活困窮者　ホームレス経験者　生きづらさ　わかりすいワークブック　知的障害　発達障害　ヘルスリテラシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法による巡回での目視調査では、ホームレス数は減少しているが、再び野宿に戻る例も少なくない。ホームレス経験者の中の 6 割に精神、知的、発達障がいがあると報告されている。アパート生活を維持継続には金銭管理、近隣との関係性などさまざまな能力が求められるが、ギャンブルやアルコールなどのアディクション（嗜癖）により、家賃や水光熱費の滞納、自殺未遂や窃盗などの犯罪に至るケースも散見される。水谷（2015）はホームレス経験者のアディクションの経時的変化を明らかにした。ホームレス経験者らの孤独感は有意に高い報告もある。路上生活に至る経緯や過程で、人間関係、家族、仕事など喪失やトラウマ経験により、自己効力感やレジリエンスが低下し、恒常的にストレス状態が底流していると推察される。

ホームレス状態を脱する前から顕在化・潜在化している生活や健康課題をアセスメントし、地域社会での生活を継続するための保健医療福祉の連携による支援が求められる。なかでもギャンブル(パチンコ含)アディクションによって生活危機に陥る方への支援は喫緊の課題である。

研究者らは、2013 年と 2014 年に、名古屋市でホームレス状態の人々を対象に、心理身体歯科に関する調査を実施し、ホームレスにおいて精神・知的障害を持つものの割合が 6 割程度を示し、それがホームレスの原因や抜け出せない理由と深く関係あることを明らかにした。

研究者らは 10 年前からクロス・アディクションに焦点を当て、生活のやりくり、ストレスとストレス対処、家計管理など経年的に調査を行い、支援団体によるアディクション・ミーティングを継続しながら、既存のワークブックの限界、断酒会やギャンブル依存の会など既存のグループへのつながりにくさがある傾向が明らかにした。路上生活に至る経緯の中で人間関係、家族、仕事など様々なものの喪失やトラウマ経験により、自尊感情や自己効力感が低い、日常的にストレス状況であることが起因していると思われる。そのため「自分らしさ」を取り戻しながら、心身の安寧、自己決定していく安心できる環境づくりが欠かせない。アルコール、薬物などのアディクションの認知行動療法に基づくワークブックやギャンブルの訳本によるワークブックは存在するが、理解度、異文化理解のためには一般教養程度の学力が求められる。また、専門家による支援環境が十分得られないなか、彼らにとって支援団体とのつながりは貴重なセーフティネットとなる。

研究代表者と西尾は、ホームレス、ホームレス経験者の支援を行いながら研究に取り組んでいる。研究代表者と大橋は、訪問看護による支援のスーパーバイズを行っている。

関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけをみると物質依存プログラム（SMARPP）を活用した取り組みは各地で始まっている。また、ギャンブルでは訳本が多く、日本文化に即していない。精神障がい特性は、ある程度踏まえられているが、ホームレス経験者であること、知的や発達障がいがあること、医療刑務所などで刑期を過ごした刑余者などの特性を踏まえたプログラムは、国内では皆無であった。彼らのおかれている状況を考えると、思考と行動における組織化されたパターンとしてスキーマがあり、そこへの働きかけも有効と推測されるが、精神、知的、発達障がいのあるホームレス経験者にとってはわかりにくい。既存の社会資源につながりにくい彼らの状況を踏まえ、まずは、彼ら一人一人の自己決定を尊重し支援をベースに、わかりやすい、日本文化に即したギャンブル（パチンコ含）アディクション・ワークブックの開発は喫緊の課題である。

アディクションに関する施策の動向をみると、2012（平成 24）年から有識者や当事者による「依存症に対する医療及びどの回復支援に関する検討会」が開催され、2014（平成 26）年度から依存症治療拠点機関設置運営事業開始、2017（平成 29）年度から、都道府県・政令指定都市に専門医療機関の指定など依存症対策総合支援事業が始まっている。

喫煙に関しては、約 5,300 種類の化学物質が含まれ、ベンゾピレンなど 70 種類以上の発がん物質が報告され健康影響が明確になっている。WHO は、設立 40 周年にあたり 1988 年 4 月 7 日第 1 回世界禁煙デーとし、1989 年から 5 月 31 日を世界禁煙デーと定め、毎年テーマを決めてたばこ対策の推進を加盟国に呼びかけている。国内では 2003（平成 15）年施行された健康増進法 25 条では、受動喫煙の防止に関する規定が盛り込まれた。現在では、①望まな受動喫煙をなくす、②受動喫煙による健康影響が大きい子ども、患者などに特に配慮する。③施設の類型・場所ごとに対策を実施するという考え方を基本に、実効性のある対策を総合的に環境整備を行っている。

アルコールに関しては、2014（平成 26）年からアルコール健康障害対策基本法が施行され、平成 28 年には第 1 期アルコール健康障害対策推進基本計画、2020（令和 2）年には第 2 期が策定された。第２期基本計画には、①将来にわたるアルコール健康障害の発生の予防、②アルコール健康障害に関する相談から治療、回復支援に至る切れ目のない支援体制の構築の 2 つが重点課題として示された。さらに第２期基本計画に基づき、2024（令和６）年２月に「健康に配慮した飲酒に関するガイドライン」が策定された。また、健康日本 21（第三次）においては、生活習慣病のリスクを高める量を飲酒している者の減少などを目標として取り組みが始まっている。

ギャンブルに関しては、2016（平成 28）年に「特定複合観光施設区域の整備に関する法律（ＩＲ推進法）」の成立・施行を契機に、ギャンブル等依存症対策を推進するため、ギャンブル等依

存症対策推進関係閣僚会議が設置され、2017（平成 29）年に「ギャンブル等依存症対策の強化について」が取りまとめられた。その後、2018（平成 30）年からギャンブル等依存症対策基本法に基づき、2019（平成 31）年にギャンブル等依存症対策推進基本計画、2022（令和 4）年に基本計画が策定されたばかりである

２．研究の目的

ホームレス経験者や生活困窮者が『何とかしたい』『地域で生活したい』と思いながらも繰り返すアディクションに対して、当事者・支援者らと協働してわかりやすいギャンブル(パチンコ含)アディクションに関するワークブックを開発し検証する。ワークブック活用にあたっての運用マニュアルも作成し広く活用できることを目的とする。

３．研究の方法

わかりやすいギャンブル（パチンコ含）アディクション・ワークブックの項目や内容の検討にあたっては、これまで支援にあたり取り組んできた既存のワークブックの他に、既存のワークブックの内容を研究者間で検討し、検討する既存のワークブックについて検討した。その後、検討するワークブックを絞り込み、これまでも支援の経験のある専門家や市民ボランティアを対象に意見を伺った。わかりやすいイラストに関しては、さまざまなサイトのイラストなどを確認し、本研究テーマに相応しいイラスト選定を行った。

ワークブックの意見を伺う対象者は、これまでに知的障がいや発達障がいのある生活困窮者や元ホームレス経験者への支援経験のある支援者を対象とした。個別支援で取り組み経験のある訪問看護師 5 名、2010 年から個別支援、2015 年から集団アプローチとしてアディクション・ミーティングの企画運営をしている市民ボランティア 3 名、行政の委託事業を受けながら①一時保護所からのアパート生活の支援、②アパート生活しながら生活破綻リスクを抱える人々を対象に家計管理支援を担っている支援者 2 名　合計 10 名を対象とした。訪問看護師 5 名のキャリアは、看護師経験 3 年目～32 年で、うち 2 名は保健師の資格を有していた。市民ボランティア 3 名は、居宅介護支援専門員、ヘルパーなどの資格を有していた。行政の委託事業による支援担当者は、社会福祉士、公認心理師の資格を有していた。意見聴取の方法は、①これまでに主に使用経験のあるワークブックをもとに、大切であると思った事項、表現のわかりづらさなどを具体的に伺った。

その他、既存のワークブック、関連書籍などを確認して、ワークブックの項目や表現方法を検討した。ワークブックは、アルコール５件、ギャンブル３件、依存症・嗜癖関連７件、保健行動２件、認知行動療法５件、スキーマ療法４件、自己効力感２件、首尾一貫感覚１件、ハムリダクション１件、ネガティブケイパビリティ１件、ヘルスリテラシー１件など専門書から漫画で描かれた書籍なども対象とした。

わかりやすいワークブックに関して、イラストや漫画導入を検討してきたが、この間、厚生労働省はじめさまざまな機関が、ホームページのサイトにイラストや漫画を導入した記事をアップしはじめた。結果として、「わかりやすさ」「生きづらさ」にフォーカスし、内容の精選、表記事項のわかりやすさなど「ヘルスリテラシー」を踏まえて検討した。

アディクションに関しては、①ニコチン、②アルコール、③ギャンブル（パチンコ含む）、④スマホ・ネットとした。基礎的な知識はそれぞれで作成することにした。共有する部分は、「生きづらさ」にフォーカスして作成することとした。「生きづらさ」については、認知行動療法をベースに、スキーマ療法や自己効力感など可視化しながら理解できる内容とするため、自身が陥っている状況を客観視できるものをどのような形で取り入れていくかについて検討した。その結果、チェック表を導入することとした。チェック表は５回まで継続して繰り返し記録ができるようにし、変化にも着目できるようにした。

保健行動を左右する「ヘルスリテラシー」に関する研究を開始し、アディクションに関する予防の強化の検討をはじめた。

４．研究成果

１）「わかりやすい」ワークブック開発

（１）構成の特徴

読み合わせや対話（ダイアローグ）をしながら、個人でも少人数グループでも活用できるワークブックとした。

（２）構成の柱

Ⅰ．共通編　『生きづらさ』

Ⅱ．各論編　①ギャンブル（パチンコ）編、②アルコール編、③ニコチン編、④スマホ編（ネット依存を含む）

（３）Ⅰ．共通編『生きづらさ』

ⅰ．スキーマ療法：8 単元程度の構成

1 単元は、A4 サイズ 14 ポイント以上のルビ付き 2～４頁

ⅱ．単元

１．安全な気持ちになれる　イメージ・もの

２．支えてくれる人

３．生きづらさやストレス
４．体験に気づく・体験を受け止める・去っていくのを見守る
５．対処方法をみにつける
６．生きづらさ」に関係する　考えかた・反応
７．社会生活の適応に向けて
８．誰にでもある回復する力（回復力）
【付録】幸せな考えかた

iii. 単元ごとのチェックリスト　5回分
・単元ごとに「学ぶ内容」を示している。
・チェックリストは、５段階で評価し、年月日、気づきや感想などが記載できる。
・各単元の最初頁に５段階の経時的変化を記載し、単元のねらいを意識化したり、自己の変化をとらえる機会となる。

iv. 評価の段階（自己評価・他者評価を含む）＊6段階
５．とてもそう思う　４．そう思う　３．どちらともいえない　２．そう思わない
１．まったく思わない　０．わからない
＊ねらいの用語は、抽象度の高い用語である。そのため、あえて『０．わからない』を評価にいれた。
＊支援者との対話や繰り返しを通して理解や認識につながることを意図している。

v.『ワークシート』として、日付記載欄を設定して巻末にまとめている。
さまざまな場面で、『ワークシート』が活用しやすいようにしている。
＊自分自身の変化を支援者と共有するツールとしても活用できることを意図している。

（４）Ⅱ．各論別のワークブック
ⅰ．種類
１．ギャンブル（パチンコ）編
２．アルコール編
３．ニコチン編
４．スマホ編（ネット依存を含む）

ii．５単元程度の構成
１単元は、A４サイズ14ポイント以上のルビ付き２～４頁とし、PowerPointは１単元２～４枚程度とした。

iii. ５単元の構成
１．予防　例）ギャンブル依存症になる前に（予防の視点）
２．早期発見・早期対応
３．アディクションになる仕組み
４．アディクションの症状　好きとの違い
５．アディクションの治療
【付録①】チェックリスト
【付録②】対象特性トピックス

（５）残課題
アディクションに関しては法制化に伴い、厚生労働省はじめさまざまな機関のサイトにイラストや漫画を導入した記事のアップが始まった。「わかりやすさ」「生きづらさ」「ヘルスリテラシー」を踏まえ①ニコチン、②アルコール、③ギャンブル（パチンコ含む）、④スマホ・ネットのアディクションの基礎知識はそれぞれで作成した。共有部分は、認知行動療法をベースに可視化し理解できる内容とし「生きづらさ」にフォーカスした。自身が陥っている状況を客観視できるようにチェック表を導入した。５回まで継続して繰り返し記録ができ変化にも着目できるようにした。しかし、製本化・運用マニュアルの作成途中であり引き続き継続していく。活用方法も含めて、検討していく。

２）フランス・パリ、モロッコ・マラケッシュのアディクション関連視察

（１）訪問期間　2024年4月～5月

（２）フランス
①パリ市内にAssocistion Addictions Franceに加盟する施設が9施設あり、CSAPA de Paris(14ème)訪問

ⅰ．依存症について

ii．依存症者への実際の支援
１．当事者と周囲の者への同時支援の重要性
２．スクリーニングテストの作成・公開
３．具体的な支援
４．アディクションへの問題意識
・アルコールに関しては、フランスの若者のアルコール摂取は、減少しているが、諸外国と比べたら問題は多く、社会全体の課題意識が高い。
・ニコチンに関しては、受動喫煙対策や電子たばこに関しては街の様子を見る限りゆるやかであった。

②街中の様子

・重要文化財や、公園内、美術館、地下鉄構内等公的機関において、敷地内禁煙がなされておらず、喫煙所が設けられている。仕切りはなく、喫煙所としての空間を設置している。
・電子たばこであれば、どこでも喫煙可能との認識か、子どものすぐ隣の席で喫煙。
電子たばこの歩きたばこも当然という感覚である。
・電子たばこに付けられている香りが、綿あめに似た香りであり、罪悪感が希薄化する助けとなっている感覚
・カフェの屋外テーブルには、灰皿が設置。カフェ（競馬の実況中継を流すバー）によっては、屋内テーブルに灰皿を設置。
・スーパーや駅近くの kiosk にたばこ販売はなく、専用たばこ店「TABAC」という看板が設置されており、LOTO（宝くじ）との兼業のようであった。価格は 11 ユーロ程であり、アルコールと比較しても、非常に高い価格設定であった。
・週末のカフェやレストラン、市内に多く点在するが、昼間から飲酒している方を多く見かける。
・平日の夕方、18 時頃、日の入りが 21 時頃であるのも関連するのか、仕事帰り風の男性数名で飲酒する方を多く見かけた。
・地下鉄駅周辺には、スーパーが点在し、アルコールはどこでも販売。
・アルコールのみ扱う場所とはなっていない。

（3）モロッコ・マラケッシュ
・アルコールコーナーが設けられ、入口には店員が常駐し、未成年者・成人の入場をチェックを行っていた。

3）アディクションがある生活困窮者に関するワークショップの開催

（1）開催学会　第 13 回日本公衆衛生看護学会
（2）開催日時　2025 年 1 月 4 日
（3）企画担当：水谷聖子、加藤友恵、大橋裕子、南千晴、高松三沙子
（4）テーマ：アディクションがある生活困窮者・生活保護受給者の健康と生活～障害がありながら地域で生活する人々の支援を通して～
（5）参加人数　42 名
（6）方法：
・実践報告 1「生活困窮者・生活保護受給者として関わる保健師の活動」瀬戸市役所健康福祉部社会福祉課保護係　保健師　加藤友恵氏
・実践報告 2「アディクションのある生活困窮者・刑余者・ホームレス経験者の地域における生活を紡ぐ訪問看護」水谷聖子
・小グループで情報共有と意見交換
①事例に対して考えたこと・思ったことや気づき
②障がいや障がいの恐れのある生活保護受給者・生活困窮者への支援体験（支援の難しさ・支援の工夫)
③アディクションや依存症のある人への支援の体験（支援の難しさ・支援の工夫)
④アディクションや依存症のポピュレーションアプローチとして
自身の気づき、体験や活動など付箋に書き出し、その後意見交換した。

（7）結果
相手の気持ちを受け止める。グレーの人が多い。
・直ちに支援につながらないこともある。つながり続けることに意味がある。
・依存症は誰にでも起こりうるもので、身近な問題としても捉えることが必要である。
・アディクション等ある方への支援には、様々な立場の人たちが断片的な場面で関わり、右往左往する中、その人の人生のヒストリーを繋げて関わる視点と支援は保健師ができる大切な役割ではないかと思う。
・なかなか繋がらない背景もありながら、その人を知ろうとする中に、相手を理解する力が生まれ、また、自分に関心をもってくれる、大切にされているという思いの積み重ねが、日々の支援と共に目にはみえない対象者の方の力を生み出すきっかになっていくのではないかと今回のワークショップに携わり、再認識することができた。

4）アディクション・依存症に関する啓発活動

アディクションに関する啓発活動として、毎年 3 月の土曜日、地域で開催される「世代間交流スマイル・コラボ」に健康相談・健康イベントとして参加した。健康やアディ クションに関する相談に加え、アディクションにつながりやすい状態、早期発見・早期治療のきっかけとなるようにイベントを工夫した。2021 年度は、コロナ災禍のため中止であった。2022 年度は、ライフステージ別のストレスチェックと唾液アミラーゼの測定を行った。アディクションに関しては、①ニコチン、②アルコール、③ギャンブルに関するチェックリスト、スマホに関しては注意喚起のチラシを配布した。2023 年度は、噛む力の確認する『かむかむチェック』を行い、アディクションと噛む関係について行った。2022 年度同様、チラシの配布に加え、チェックリスト、ポスター掲示を行った。2024 年度はライフステージ別のストレスチェックと唾液アミラーゼの測定を行った。傍らで、①ニコチン、②アルコール、③ギャンブルに関して PowerPoint データのスライド上映を開催した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 水谷 聖子(日本福祉大学 看護学部)，森本 深雪，澤田 さやか，鵜飼 亜紀，藤村 由美子，岡田 文美，大橋 裕子，南 千晴，高松 三沙子，森 亮太	４．巻 25　№13
２．論文標題 アルコール依存症に認知症を併発した高齢のホームレス経験者への訪問看護　ICFモデルを活用した地域生活定着支援	５．発行年 2023年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 93-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水谷聖子、高松三沙子、南千晴、森本深雪、澤田さやか、鵜飼亜紀、岡田文美、大橋裕子	４．巻 24、12
２．論文標題 ホームレス経験のある30代男性へのツールを活用した訪問看護－ワークブックやマッピングシートの活用を通して－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 地域ケアリング	６．最初と最後の頁 61-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水谷聖子	４．巻 41
２．論文標題 ホームレス経験者・刑余者の「地域で生活したい」思いを支える訪問診療・訪問看護－市民団体と協働し社会とのつながりを紡ぐ－	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本生活指導学会　生活指導研究	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大橋裕子、澤田さやか、森本深雪、鵜飼亜紀、岡田文美、水谷聖子	４．巻 51
２．論文標題 地域生活への適応が困難な身寄りのない知的障害・発達障害のある事例への訪問看護－当事者が望むアパートでの生活継続のための支援の検討－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第51回日本看護学会論集　ヘルスプロモーション・精神看護・在宅看護	６．最初と最後の頁 263-266
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 南千晴 高松三沙子 大橋裕子 森礼子 中島理江子 水谷聖子
2．発表標題 労働者のヘルスリテラシーに関する文献検討 ー新入社員の健康管理能力支援に向けてー
3．学会等名 第96回　日本産業衛生学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 高松三沙子、南千晴、森礼子、大橋裕子、水谷聖子
2．発表標題 大学生のヘルスリテラシーに関する文献検討　～将来に向けた健康管理能力の支援～
3．学会等名 第82回　日本公衆衛生学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 Yuko Oohashi, Sayaka Sawada, Yumiko Fujimura, Aki Ukai, Ayami Okada, Seiko Mizutani
2．発表標題 Support for acquiring the self-management actions necessary for people with intellectual and developmental disabilities to live in the community.
3．学会等名 ICCHNR2022　スゥエーデン　（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Miyuki Morimoto,　Sayaka Sawada, Yumiko Fujimura, Ryota Mori,　Aki Ukai, Fumi Okada, Yuko Oohashi, Seiko Mizutani
2．発表標題 Providing home visit healthcare to previously　homeless and convicted individuals reintegrated　in communities: Collaboration with citizen　groups in social connectivity
3．学会等名 ICCHNR2022　スゥエーデン（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名
南千晴　高松三沙子　大橋裕子　森礼子　水谷聖子、中島理江子

２．発表標題
Health Literacy among College Students and Workers: A Literature Review to Support Healthcare Competency in New Employees

３．学会等名
ICOH2024　モロッコ（国際学会）

４．発表年
2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	嶋田　貴之 (Shimada Takayuki) (10889885)	日本福祉大学・看護学部・助教 (33918)	
研究分担者	高松　三沙子 (Takamatsu Misako) (20907703)	日本福祉大学・看護学部・助手 (33918)	
研究分担者	水谷　勇 (Mizutani Isamu) (60190641)	神戸学院大学・人文学部・教授 (34509)	
研究分担者	大橋　裕子 (Ohashi Yuko) (70352911)	日本福祉大学・看護学部・准教授 (33918)	
研究分担者	西尾　彰泰 (Nishio Akiyasu) (90402172)	岐阜大学・保健管理センター・非常勤講師 (13701)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	南　千晴 (Minami Chiharu) (20962872)	日本福祉大学・看護学部・助手 (33918)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関